

精神遅滞児への言語指導に関する一考察

松田 淳之助

はじめに

ことばを使用するという事は、他の動物にはみられない人間特有のものである。そのことばにはいろいろな機能がある。すなわち、コミュニケーションの道具としての機能、人を動かす機能、感情表現・自我の表出としての機能、思考の道具としての機能などである。

これら諸機能のうち、話しことば Speech についてみると、一番最初のコミュニケーションの道具としての機能が極めて重要な意義を持つといえる。なぜなら、それはお互いの意思疎通、相互理解などに不可欠だからである。

このような話しことばは通常、乳児期の喃語から幼児期にはいり、1語文、2語文、多語文と発達し、それと共に語いの量的・質的発達、さらには発音の乱れ、不明瞭さから正しく、かつ明瞭化していき、幼児期のおわりを迎える頃には日常の用には事欠かない程度にまで発達していくのである。しかしながら、精神遅滞児にあってはこのようなスムーズな発達がみられないのが一般である。その理由として考えられることはいくつもあるが、そのうち主なもののみ挙げてみると、まず、脳の発達そのものが遅滞していること、このことはとりもなおさず、言語中枢、神経諸過程の遅滞、障害等も当然考えられることである。今一つは、彼らの対人関係において、知能が劣っていることによる親の過保護、溺愛、あるいはその逆の放任・無視、はたまた友人など一般健常児者の彼らに対する蔑視・白眼視等コミュニケーションの稀薄による話しことばの、いわゆるインプット、アウトプット共に貧弱となりやすい、すなわち、言語環境が彼らにとって極めて不利な条件下におかれやすい、ということであろう。

精神遅滞児における言語発達遅滞の主な要因を2点指摘したが、これら2点のうち、前者、すなわち、脳の発達遅滞、損傷による要因から、精神遅滞児への言語指導・訓練はその効果に疑問あるいは否定的・悲

観的見方があったことは否めない。しかしながら近年、精神遅滞児の言語の発達過程に関する研究、また、言語指導の方法・内容等に関する実践研究なども多くみられるようになり、先の否定的・悲観的見方が徐々に改められつつあるようである。実際、筆者の過去の臨床経験からも、彼らの大多数は発語・理解語ともども大なり小なり獲得しているのである。ということは、言語刺激を与える、また、発語の機会を与えれば、当然それなりの効果は期待できる筈である。このことに思いを至し、このたびは発音の不明瞭な精神遅滞児を選び、発音の明瞭化のための言語指導のあり方を追究してみたいと考える次第である。

目 的

自分の話したいことも発音が不明瞭・不正確であったり、そのことばの意味・内容が相手側に正しく伝わらない。そこで本研究では発音の明瞭化に焦点をしばり、そのための指導・訓練のあり方を考察してみることが目的とする。

方 法

1) 対象児：県内A精薄児施設入所中の言語不明瞭な中・重度精神遅滞児6名。すべて男子。そのうちわけは表1のとおりである。

2) 刺激語：筆者が各対象児に対し、1回に聞かせた刺激語は、1語がカ行・ガ行・サ行・タ行・ダ行・ハ行・ラ行の計7行の35コ、以下2語から6語まで各10コ計50コで、いずれも彼らにとってやゝ発音しにくいものを選んだ。2語から6語までの刺激語は表2のとおりである。

3) 手続き：①、先の6名に対し、発音指導を原則週1回、8ヶ月間（ただし、夏休み1ヶ月余は対象児の帰省等のため中断）、のべ31回実施した。②、この6名を半円形に着席させ、筆者はその真中あたりに相対して着席した。③、1回の指導では、まず全員に

表1. 対象児一覽

| 児童 | 開始時 CA | 知能程度 (IQ) | MA | 言語障害状況 | その他の臨床像 |
|----|-----------|--------------|-----|-----------------------------------|-------------|
| A | 16:10 | (20) 重度 | 3:4 | 3語以上になると、殆ど聞きとれない。 | 寡黙、寡動 |
| B | 14:7 | (33) 中度 | 4:8 | 軽度の言語機能障害。3語以上になると、若干聞きとりにくくなる。 | 寡黙、温厚 |
| C | 11:1 | (36) 中度 | 4:0 | 乳児期頭部外傷で言語中枢傷つく。2語以上の発音。殆ど聞きとれない。 | 反すう癖 |
| D | 14:11 | (28) 重度 | 4:2 | 中度の言語機能障害。2語以上かなり聞きとりにくい。 | 興奮しやすい、失禁 |
| E | 12:5 | (30) 重度 | 3:7 | 3語以上になると、途端に、聞きとりにくくなる。 | 情緒不安定、怒りっぽい |
| F | 15:6 | (25) 重度 | 3:9 | 舌の異常(舌先、やゝ短い)、それによる、発音不明瞭。 | 肥満、動作緩慢 |

※ 全員、聴覚は正常

筆者の舌の出し入れ・回転動作を見せる。そのあと、それぞれ10回ぐらいつづ模倣させた。
④、次に左端の者から1名づつ個別に筆者が1語から6語までの刺激語を1コづつ与え、その後対象児に言わせた。その間、他の5名は筆者の刺激語をインプットすると共に1名の対象児の発音も聞いているわけである。

結 果

以上のような手続きで言語指導を実施したが、その結果を対象児別に、1語から6語までそれぞれ特徴的なものだけについて述べていく。

A児：35コの中の1語のうち、サ行とつ・るの7語が最後まで正しい発音ができなかった。すなわち、さ→しゃ、し→ち、す→しゅ、せ→しゃ、そ→つお、つ→ちゅ、る→りゅとそれぞれ発音、だがそのほかは大体正しい発音となった。

2語：10コのうち終結時に正しく発音できたのは、かき・へび・いけの3コだけにとどまった。いす・ぼす・すし・やりはそれぞれ、いしゅ・ばしゅ・しゅち・やいという最初の発音が最後までほとんど変化しなかった。また、かさとみずは初回時正しく発音できたのに、10回目以降はかしや・みじゅという発音に開始した。また、はしは途中、10回目、20回目は正しく発音できたのに初回時のあしが終結時ははちという発音で終わった。

3語：終結時に正しく発音できたのは皆無だった。そのうち、きつねだけが途中2回正しい発音となったが他はことごとく最初から最後までほとんど変化はみられなかった。

4語以下ではにんじのみ正しい発音ができただけであとは初回の発音がおおむね、大きな変化をみせず

表2. 刺激語一覽

| 2語 | 3語 | 4語 | 5語 | 6語 |
|----|-----|------|--------|---------|
| かき | りんご | ばんざい | こいのぼり | うんどうかい |
| いす | あひる | ただいま | ゆきだるま | こうらくえん |
| へび | らくだ | はみがき | ヘリコプター | リズムあそび |
| ぼす | ぬりえ | ひのまる | あらいぐま | れんげばたけ |
| かさ | めがね | せんせい | カスタネット | おたまじやくし |
| みず | らじお | にんじん | 本をよむ | 魚をとる |
| はし | きつね | ろうそく | 花がさく | 洗濯する |
| いけ | すずめ | しりとり | 歯をみがく | 犬がほえる |
| すし | はだし | てぬぐい | 海にいく | さくらの花 |
| やり | つくえ | こしかけ | 雨がふる | 金魚がいる |

に終結時をむかえた。が、4語以下で特に顕著だったのははみがき→はいがき、カスタネット→アスタエトなどのような置換、しりとり→ちりり、ヘリコプター→コプター、運動会→かい、のような省略が多くを占めたことである。

B児：1語では本児はおおむね、ハ行の発音が困難であった。すなわち、ハ行は初回時すべて、ア行の発音となった。そしてそれは終結時まで続いた。ただ、はだけは20回目以降正しく、は、と発音できるようになった。そのほかでは、つ→ちゅ、ず→じゅといずれも途中正しい発音がなされた時もあったが終結時は上記のような発音に終わった。

2語：かき・ぼす・かさ・はし・いけの5コが初回時発音不明瞭だったが、10回目、20回目あたりから明瞭化し終結時には正しい発音ができるようになった。が、いす・へび・すし・やりの4コはそれぞれいしゅ・えび・しゅし・ありと初回時の発音が最後まで変化することなく続いた。また、みずは初回のみじゅが10回目、20回目正しく発音できたのに最後はまたみじ

ゆとなってしまった。

3語：10コのうち半分の5コ（りんご，らくだ，ぬりえ，らじお，つくえ）が2語同様10回目，20回目あたりから終結時正しい発音可能となった。だが，あひるはあいる→あーる，めがねはめらね→えあね，すずめはす→め→しゅ→め，はだしはあらし→はらし→はじゃし，また，きつねはちぢゅね→30回目正しい発音→きちゅねでそれぞれ終わった。

4語：終結時正しく発音できたのは，ひのまる，ろうそくの2コだけだった。その他では，ばんざいがばんらい→ばんだい→ばんじゃい→ばんだい，ただいまがたらいま→ただいま→たらみあ→たらいま，はみがきがはいがき→いあ→がき→みいあき，せんせいがしんしえい→しんせ→せんちえ→など10回目ごとに変化のみられたもの，にんじんのにんじ，こしかけのしーかけ，しりとりのおしりなど初回の発音が大きく変化なく最後まで続いたものもあった。

5語・6語：正しく発音できたのは皆無だった。一般的にみると十数回前後までは多少の変化がみられた（例えば，カスタンネットがきしゃねつと→くさねつと，洗濯するがせんた→しゅる→え→た→するなど）が，それ以降はほとんど変化がみられなかった。また特に6語に省略が目立った。

C児：1語はおおむね，ハ行のA行化，サ行のタ行化発音が目立った。だが，その中，はは最初から正しく，へ・ほは途中から正しく発音できた。その他では，ず→じゅ，る→りゅの発音が最後まで続いた。

2語：へびといけが10回目以降，はしが30回目以降正しい発音が可能となった。かき，いす，ばすは最初から最後までそれぞれ，かち，いちゅ，ばちゅと発音，かさは最初かちゅ，10回目以降はかつあ，すしは最初しゅしから10回目すしゅ，20回目以降ちゅち，やりはやい→あり→やじでそれぞれ終わった。また，みずは初回時正しく発音できたのに10回目以降はみじゅという発音で終わった。

3語：終結時正しく発音できたのは，らじおの1コのみだった。めがねときつねは最初正しく発音できたのに，20回目，10回目以降めあね，ちゅ→ねと発音，その他あひるはあーる，らくだはかくら→かくだ，ぬりえはうぬえ→ぬ→ね，すずめはす→め→ちゅ→め，はだしははらし→は→ち，つくえはつ→え→つ→ふえでそれぞれ終結した。

4語～6語：てぬぐいとこうらくえんの2コがそれぞれ30回目に正しい発音できたものの，終結時の正しい発音は皆無だった。回を重ねるごとに正しい発

音に近づいたのは，ひのまるのうーう→まりゅ，しりとりのおしり→しゅりとり，ヘリコプターのえいこくた→へーこぶた→，洗濯するのする→ちんた→しゅるの4コにすぎず，他はほとんど変化なく，5・6語の単文に省略（雨がふる→あめ，犬がほえる→おえるなど）が目立った。

D児：1語ではラ行に発音不明瞭が集中した。すなわち，り→りゅ→ちい，る→→ちゅ，れ→け→しゅ→ひえなど，だが，ら・ろはともに初回と10回目はそれぞれ，はあ→しゅ，ほ→しゅという発音だったが20回目以降は正しい発音となった。ラ行以外ではガ行の濁音が最初はカ行の発音だったが10回目以降正しい発音となった。だが，す→ずだけは最後までしゅ・じゅで終わった。

2語：終結時正しい発音できたのは，へび，はし，いけの3コだけだった。いすとかさは30回目に正しい発音できたが終結時はいゅしゅ（初回時も同じ），かひゅ（初回時はかちゅ）との発音で終わった。また，すしとやりは初回時は正しい発音できたのに，10回目以降，すち，ありと発音，終結時はそれぞれ，しゅし，やじという発音に終わった。その他では，かき→かち，ばす→ばちゅ，みず→みじゅという発音に終始した。

3語：1度でも正しく発音できたのは，りんご（10回目），らじお→すずめ（それぞれ初回時）の3コのみで他はすべて不明瞭な発音で終結した。しかも，20回目以降はほとんど変化がなかった。すなわち，りんご→いんお，あひる→あーる，らくだ→あ→くだ，ぬりえ→ぬ→りえなど真中引き延ばしのような発音に終始した。

4語：ばんざいとせんせいがそれぞれ，20回目，10回目から正しい発音となった。それ以外は，引き延ばしか省略，置換（ただいま→た→いあ，しりとり→ち→とい，こしかけ→か→け→など）が目立ち，また20回目以降はほとんど変化しない発音に終始した。

5・6語：正しく発音できたのは皆無。そのほとんどが引き延ばしと省略（特に単文に顕著，例えば，花がさく→いあ→く，犬がほえる→おーるなど）に終始した。また，10回目以降は，本をよむがほんをおむ→お→おおう→お→む→おんお→おむ，リズムあそびがじゃちゅじゅ→うじゅう→あしゅ→う→じゅ→う→い→あ→しゅ→いとほぼ10回目ごとに変化がみられたもの以外，ほとんど変化がなかった。

E児：1語ではす・ず・づの3コが最後までしゅ・じゅ・ちゅで終わった。そのうち，す・ず・ほはそれぞ

れ、30回目あたりで一時正しい発音となった時があった。その他ではり・るが終結時にそれぞれ、に・りゅとなった。それ以外はおおむね正しい発音となった。

2語：いす・みず・すし以外は正しい発音で終了した。いすは20回目に、みずは10～20回目にそれぞれ正しい発音となったが、結局は初回時のいしゅ・みじゅで、また、すしは最後までしゅして終わった。

3語：あひる・すゞめ以外は正しい発音で終了した。そのうち、りんご・らくだ・めがね・らじお・はだしの5コは最初から(2語は、かき・へび・いけ・やりの4コだった)正しい発音ができた。最後まで正しくできなかったあひるはあいる→あーる、すゞめはしゅじゅめ→すじゅめで終わった。

4～6語：3語までの好調さに比し、4語以上になると途端に不調になり終結時正しく発音できたのは皆無だった。それでも、途中で正しい発音のみられたのがいくつかあった。すなわち、ばんざい・洗濯するが20回目に、にんじん・運動会が10回目に、先生が10回目～20回目がそうであった。だが、本をよむのように初回時～10回目と正しく発音できたのに20回目ほんおむ、終結時よむと大きくくずれたのもあった。4～6語では終結時、ヘリコプターがえーこぶたー、ろうそくがろーしょく、れんげばたけがれんぎゃーばたけなどかなり正しく発音できたのもいくつかあったが、多くは、たとえば花が咲くをさく、おたまじゃくしをおたーし、さくらの花をしゃくらーはななど置換・省略などの発音に終わった。

F児：この子は表1にも示したように舌の異常という器官障害を有する子だが、それでも1語はかなり発音明瞭だった。不明瞭だったのは主としてサ行だった。すなわち、さ→つあ、し→ち、す→しゅ→ちゅ→つう、せ→しえ→て→つえ、そ→つお→となどの発音となった。このうち、さ・その2コは初回時のみ正しい発音ができた。サ行以外では、じ→ずい、ず→du→じゅ、ひ→いなどの発音や、つの発音が初回時と10回目は正しかったのに、20回目以降ちゅとなったのもあった。

2語：終結時正しい発音だったのは、かき・へび・ばす・はし・いけの5コだった。やりは途中2回正しい発音のみられたが初回時と終結時はともにありだった。あとは大体、いす→いしゅのようにサ行をシャ行と発音した。

3語：終結時正しく発音できたのは、りんごとはだしの2コだった。このうち、はだしは初回時からずっと正しく発音できた。あひるは20回目だけ正しい発

音となったが、それ以外はいると発音、また、らくだは初回時から20回目まで正しく発音できたのに終結時はらちゅだと発音した。その他の語は途中若干の変化のみられたのもあったが、終結時においてはおおむね、ぬりえ→ぬーれ、らじお→らーじょ、きつね→ちゅーね、すずめ→じゅーじえ、つくえ→ちゅーくえなど途中引き延ばし、省略などの発音に終始した。

4～6語：途中1回でも正しく発音できたのは、ひのまる(初回時)とせんせい(10回目)といずれも4語の2コだけでその他はすべて不明瞭な発音で終わった。その不明瞭さも4～5語はたとえば、ばんざい→ばんつあい、ただいま→たーま、にんじん→じんじー、本を読む→ほんおちゅ、あらいぐま→あーいうまなど多少なりとも聞きとれる範囲内の発音だったが、6語になると、れんげばたけ→じえんでー、おたまじゃくし→うーちゃー、洗濯する→しえんでーしゅーなど、こちらがその気で聞こうとするから何とかそれらしい発音もないではなかったが、ほとんど聞きとれないほどの不明瞭さになってしまった。

考 察

以上、6名の対象児に対して行なった言語指導の経過ならびに結果をもとに若干の考察を加えていく。あわせて、今後検討すべき課題についても論究していく。まず、語数別にみていくことにする。

1語(35コ)：終結時に発音不明瞭だった語を対象児別に列挙してみると、

A児：主として、サ行。その他、つ・る。

B児：主として、ハ行。その他、つ・ず。

C児：主として、ハ行・サ行。その他、す・ず・る・つ。

D児：主として、ラ行。その他、す・ず。

E児：す・ず・つ・り・る。

F児：主として、サ行。その他、じ・ず・つ・ひ。

というように、かなりの個人差がみられるものの全体的にみると、サ行が最も多くて3名、ついで、ハ行の2名、それに、ラ行の1名となっている。その他では、つ・ずが5名、す・るが3名、あと、じ・り・ひが各1名となっている。

ところで、構音(調音)の発達が正常な場合、いつ頃正しく発音できるようになるのであろうか、このことについて表3・表4のような調査^{1),2)}がある。この表によると両者の間に若干の違いはあるものの、大筋においては大体一致している。それによると、バ行・パ行・マ行のように両唇によるはれつ音・鼻音などの

表3. 75%の幼児が調音できる年齢

| 年 齢 | 子音を含む音節 |
|----------|---|
| 3歳5ヶ月以前 | カ行音, ガ行音, タ行音, ダ行音, バ行音, ㅍ行音, ナ行音, マ行音, ヤ行音, キュ, ジ, ジュ, チ, チョ, ヒ, ヒャ, ビョ, ビョ, フ, ミュ, ワ, ソ |
| 3:6~3:11 | ギョ |
| 4:0~4:5 | リュ, ハ行音(ヒ, フ以外), シ |
| 4:6~4:11 | |
| 5:0~5:5 | ザ行音(ジ以外), ツ |
| 5:6~5:11 | ラ行音, サ行音(ソ以外) |

表4. 構音の完成年齢

| 年 齢 | 行ごとにまとめた音 |
|-----|-----------------------|
| 2歳代 | ㅍ行, ㅂ行, ㅃ行, ヤユヨワン, 母音 |
| 3歳代 | ㅈ行, ㅊ行, ㅅ行, ㅆ行, チャ行 |
| 4歳代 | カ行, ハ行 |
| 5歳代 | ㅌ行, ㅍ行, ㅂ行 |

発音がまず発達, ついでタ行, ナ行, チャ行のように歯ぐきと硬口蓋による, いわゆる舌先によるはれつ音・まさつ音・鼻音などの発音が発達, そして一番遅いのが, ハ行・サ行・ラ行などのように硬口蓋と軟口蓋, いわゆる, 奥舌によるはれつ音・まさつ音・ふるえ(はじき)音などである。このような発達の様相と照らしあわせてみると, この6名の対象児の発音発達の段階は3~4歳程度まででこれは彼らの知能レベルMAとはほぼ同一である。それに, 舌, 特におく舌の活動が不十分, つまり舌の機能障害を示唆するものと考えられよう。

2語(10コ): 終結時に正しく発音できた語を対象児別に列挙してみると

- A児: かき・へび・いけ
- B児: かき・ばす・かさ・はし・いけ
- C児: へび・はし・いけ
- D児: へび・はし・いけ
- E児: かき・へび・ばす・かさ・はし・いけ・やり
- F児: かき・へび・ばす・はし・いけ

というように, 箇数では最多7コ, 最少3コとかなりの開きがみられたが, 語別では, いけが6名全員正しい発音のできたのに続いて, へび・はしが5名, かきが4名, ばす3名, かさ2名, やり1名で, いす・みず・すしの3コは皆無だった。すしのように2語ともサ行の場合は先の表3・4からもその困難さがうな

づけるが, ばすが半分の3名正しく発音できたのに対して, いす・みずが皆無とはどういうことなのだろうか。また, 困難とされるサ行の中にあっても, はしは6名中5名もが正しく発音できている。このことも, どのように考えたらよいのだろうか。

これらの検討のため各対象児の発音内容を分析してみると, すしの場合6名中5名までがすの発音をしゅ・ちゅと発音, そして, しゅの発音は6名中5名までが正しく発音している。ということは, 同じサ行でも, すの発音は比較的困難であるのに対し, しゅの発音はそれほどではないと考えられる。したがって, はしの場合, ほとんどの者が正しく発音できるのもうなづけるわけである。あやまった1名は, はがあになって, あしと発音しているのである。次に, すの発音だがいすの場合, 1名のみがいちゅと発音, 他の5名はすべていしゅと発音している。なお, いちゅと発音した子はばすもばちゅと発音している。またいしゅと発音した5名の中3名がばすと正しく発音している。このことは, いの発音の次にすと発音することより, ばの発音からすの発音に移る方がすの発音を容易にしているのではないかと考えられるがより詳細な検討は今後にまたねばならない。皆無だったもう一つの語, みずをみてみると, 全員がすの発音をじゅと言っている。先の表3・4をみても, ザ行の発音が正しく言えるようになるのは最も遅く5歳代となっている。ということは彼らにとってずは勿論, ザ行の発音はかなり困難ともなるものであると考えられる。しかし, ザ行の中でもじゅの発音は6名中5名が正しく発音できている。これはザ行の中でもじゅだけが他の4語に比し, 舌の動きが微妙ながら容易である(動かしやすい)ということによるのではないかと考えられるがこれも詳細な検討は今後にまたねばならない。

次に, 3語の発音について終結時正しく発音できた語を対象児別に列挙してみると

- A児: D児は皆無
- B児: りんご・らくだ・ぬりえ・らじお・つくえ
- C児: りじお
- E児: りんご・らくだ・ぬりえ・めがね・らじお・きつね・はだし・つくえ
- F児: りんご・はだし

というように, 皆無の者が2名となったのに対し, E児のように2語の7コより3語の方が1コふえて8語も言えた者まで現われるという一見奇妙な結果となった。その内容を分析・検討してみると, B児の場合, 1語で不明瞭だったハ行, つ・ずのはいった単語が矢

張り不明瞭（あひる→あーる、きつね→きちゅね、すずめ→しゅーめなど）だったほか、1語の時は正しく発音できた、だ・がが3語のはだし・めがねになるとそれぞれ、はじし・めあねとなった。しかし、そのだも、らくだとだが最後になった場合は正しく発音できたのである。また、つのの発音もきつねの場合はちゅとなったが、つくえの場合は正しく言えたのである。このことは、1語では正しく言える発音も、その前後の語によって妨害されることがあるということを示唆するものではなからうか。このことも、今後更に詳細に検討を要する課題であろう。

次に、2語の時より1コ増えたE児についてみると、本児は1語ではす・ず・つのの3コが不明瞭だったわけで、3語ではこれらの語を含む単語が少なかったことが8コも正しく言えた理由と考えられる（不明瞭な発音はすずめ→すじゅめ、あひる→あーる）。その他、1語では不明瞭だったつのがつくえ・きつねなどの3語では正しい発音となったり、逆に、正しく言えたひがあーると発音の乱れ（省略）を生じさせるなど語数の増加がプラス・マイナスなど個人内にさまざまな影響を与えることは間違いないようである。この、影響の与えられ方については今後の重要な検討課題であると考える。

また、正しい発音が皆無だったA・D児、1コだったC児などの発音不明瞭はそのほとんどが省略・置換・歪みなど発音の乱れである。この3名以外の発音不明瞭も、たとえばB児のあひる→あーる、すずめ→しゅーめ、E児のあひる→あーる、F児のぬりえ→ぬれ、きつね→ちゅーねなどほとんどが発音の乱れとなっている。3語以上になると途端に発音の乱れが生ずるということが一つの特徴的現象であるといえそうだ。そもそも、この発音の乱れは幼児期にみられるもので（だから、通常、幼児語ともいわれる）、その理由として発声器官の未成熟、成人の発音を正確に聞きとる聴能力不足、それに話し手の舌先の動きが見えないことによるものとされている。だが、それらの発達に伴い、この発音の乱れも大体5歳代には消滅してしまうのが通常である。ということは、この発音の乱れの点からみても彼らの発音発達の段階は、先の1語の時と同様、せいぜい3～4歳程度までにとどまっているものといえよう。

次に4語の発音について1度でも正しく発音できた語を対象別別に列挙してみると

A児：にんじんだけが最初から終結時まで正しく発音できた。

B児：ろうそくが最初から終結時まで正しい発音が続いた。それと、ひのまるが20回目以降正しい発音となった。

C児：終結時正しく発音できたのは皆無だったがただ1つ、てぬぐいが20回目に正しい発音となった。

D児：せんせいが最初から終結時まで正しい発音が続いた。それと、ばんざいが20回目以降正しい発音となった。その他、にんじんは初回時のみ正しく発音できたのに10回目以降は一じーとなり、終結時にはにんじーで終わった。

E児：終結時、3語の時は8コも正しい発音ができただに、4語では皆無だった。が、ばんざいが20回目に、せんせいが10回目～20回目に、にんじんが10回目にそれぞれ正しい発音となっている。

F児：ひのまるが初回時に、せんせいが10回目に正しく発音できたが終結時の正しい発音は皆無だった。

というように、2語・3語の場合に比し正しく発音できた語数は当然とはいえ激減している（終結時に正しく発音できた語の総計箇数は2語の場合26コ、3語の場合16コ、4語の場合5コ）。あわせて、5語・6語の場合についてみると終結時に正しく発音できた者は皆無、中途1度でも正しく発音できたのは5語ではE児の1コ（本をよむの初回から10回目）のみ、6語ではB児の1コ（初回洗濯する）、C児の1コ（20回目の後楽園）、E児の2コ（10回目の運動会、20回目の洗濯する）の合計4コだけだった。この4～6語の発音不明瞭の内容は乱れの中でもそのほとんどが省略だった。また、もう一つの大きな特徴は初回から10回代まではかなりの変化がみられたが、20回目以降になるとそれがあまりみられなくなったことである。しかし、その中にあって一筋の光明らしきものがみられるのは、たとえば初回時に花がさく→さく、雨がふる→ふる、リズムあそび→りじゅむなどのように、その前半か後半のみの発音しかしなかったものが終結時には、はあーさく、あめーうる、りじゅむあしよいなど不明瞭ながら一応、語全部を発音しだした箇数が顕著に増加したことである。

以下、これらのことについて考えてみる。まず、4語以降正しい発音が激減したことについてみてみると、彼らの言語発達水準が前にふれたように正常幼児の3～4歳程度とすれば、3歳前後の正常幼児の83%がざぶとんを、78%がレコードを正しく発音したという報告³⁾がある。反面、くすりは67%、さかなは4歳で72%と構音内容により一概にいえないがその容易なものでは3語以内と4・5語との間にそれほどの違

いはみられないようである。しかし、精神遅滞児の場合はかなり事情が異なるようである。この辺の事情を十分踏まえた指導のあり方を検討する必要がある。すなわち、構音の完成標準年齢、それぞれの対象児の言語発達の実態等を十分考慮にいれ、また3語以内の発音指導を十分に行なった上で4語以上のそれにはいっていくことを考えるべきであろう。

次に、5語・6語に多くみられた前半又は後半だけの発音（反応）についてだが、その内容をよくみると2つの特徴がみられる。その1つは、5語・6語ともこのほり、おたまじゃくしなどの単語に比し本をよむ、洗濯するなどの単文の方に前・後どちらかだけの発音が多かった。5語・6語、あるいはそれ以上になると耳からはいったことばを大脳に蓄える作業、つまり記憶力が大きくかゝってくるが、5語・6語の場合それが単語より単文においてかなり困難が増すようであるということ。いま1つの特徴的なことは、そのような中であっても個人差が顕著であるということ。すなわち、A児・C児・D児の場合は前半又は後半の省略が顕著だったが他の3名はそれほどでもなかった。また、前者の3名の中、A児・C児は10回目、20回目あたりから不明瞭ながら語全体の発音が聞かれるようになってきた、などかなりの個人差がみられたのである。ともあれ、記憶力の低劣は発語以前の問題である。言語指導ともども、記憶力を高める方途をも真剣に考えねばならぬ事柄である。

さて最後に、結果ならびに考察の前半でもふれたように全体的にはあまり変化がみられなかった、つまり指導効果は乏しかったがそのことについて考えてみたい。指導効果をみる1つの手掛りとして発音不明瞭だった語が初回時と終結時とでどのように変化したか、その箇数を語数別・対象児別にして試みる（表5）。こ

表5. 語数別、発音不明瞭語箇数

| 児童 | 1語 (35コ) | | 2語 (10コ) | | 3語 (10コ) | | 4語 (10コ) | | 5語 (10コ) | | 6語 (10コ) | |
|----|-------------|----|-------------|----|-------------|----|-------------|----|-------------|----|-------------|----|
| | 初 | 終 | 初 | 終 | 初 | 終 | 初 | 終 | 初 | 終 | 初 | 終 |
| A | 9 | 6 | 6 | 7 | 10 | 10 | 9 | 9 | 10 | 10 | 10 | 10 |
| B | 9 | 7 | 7 | 5 | 10 | 5 | 9 | 8 | 10 | 10 | 9 | 10 |
| C | 14 | 9 | 7 | 7 | 7 | 9 | 10 | 10 | 10 | 10 | 10 | 10 |
| D | 15 | 5 | 5 | 7 | 8 | 10 | 8 | 8 | 10 | 10 | 10 | 10 |
| E | 3 | 5 | 6 | 3 | 5 | 2 | 10 | 10 | 9 | 10 | 10 | 10 |
| F | 10 | 10 | 8 | 5 | 8 | 8 | 9 | 10 | 10 | 10 | 10 | 10 |
| 全体 | 60 | 42 | 39 | 34 | 48 | 44 | 55 | 55 | 59 | 60 | 59 | 60 |

※ 初回時…初、終結時…終

の表5をみてわかるように、かなりの個人差がみられるものの全体的にいえることは、1語はまあまあの効果があったといえよう。だが2語・3語はごく僅かの効果しかみられず、4語以上は効果なしとしかいえないような結果に終わっている。このような結果に終わった原因として考えられることの1つは、指導・教育の臨界期ということである。狼に育てられたあのアマラ・カマラの例を持ちだすまでもなく、諸学習にはそれぞれ最適時期があると考えられ、その時期を過ぎると学習効果が期待できなくなる、いわゆる臨界期があるということは既に周知のことである。このたびの対象児の年齢は表1からもわかるように、最年長は16:11、最年少でも12:5、平均14:2とかなり高年齢である。人間の場合の臨界期は動物ほど限定されず、ある程度柔軟性に富むとはいうものの14:2という年齢はもう臨界期を過ぎてしまっているのではなからうか。精神遅滞児における言語学習の臨界期が何歳頃なのか、これを確認することはその指導にあたって大きなポイントとなるところから、今後の重要な検討課題といえそう。

原因の2つ目として考えられることはその方法（期間、間隔も含め）についてである。すすめ方は前に方法のところ述べたように、全員同じ語、単語・単文を用いたが発音の明瞭・不明瞭だった語にかなりの個人差がみられたことは既にみてきた通りである。このことから、個人の発音特性にあわせて明瞭語より不明瞭語に重点をおいた指導を行うべきではなかったか。学習にはその類似度の多少によって転移効果が考えられるが、こと言語学習に関しては、たとえば比較的早くから明瞭な発音をするア行・マ行等を数多く言わせても、それが不明瞭な発音（サ行・ラ行など）への転移効果は皆無に等しいという結果になったことから、他の学習に比しほとんど転移効果は期待できないといえてよい。このことから、不明瞭語のみか、明瞭語に不明瞭語を加えた単語（たとえばあさ・みどりなど）の発音指導を行うべきではなかったか、このような配慮不足がその原因の2つ目と考える。また、期間、間隔についても、もっと長く、間隔も1週間に1度より2度・3度と短かくすれば当然その効果もよりあがるだろうことは十分考えられるところだがそのためには1日の生活の流れの中から言語指導のための時間捻出をいかにするかを考えていかねばならない問題といえよう。

原因の3つ目として考えられることは、彼らの言語障害の原因診断が十分になされていないということ

ある。言語発達遅滞の原因の1つに知能障害(精神遅滞)があげられている。ではなぜ知能障害が言語発達遅滞の原因となるのか。両者の関係が十分明確にされていない点に問題が残る。が一応考えられることは知能障害は脳及び大脳中枢神経系の遅滞・障害も当然関与しており、その中には言語中枢の遅滞・障害も含まれることから、それが言語発達遅滞の原因となるであろう、ということである。しかしそれも、もう一つつっこんで言語中枢の遅滞・障害といってもその器質面なのか、あるいは機能面なのか、その両方なのかなどが明らかではない。機能面ならばアプローチのいかんによってその回復もある程度は期待できよう。しかし器質面ならば的確な医学的処置を用いない限りその期待は絶望的である。この6名の対象児についてもB児・D児に「言語機能障害」が明記されているだけで、器質障害の有無・程度等については全員不明である。もし、器質障害を有しておれば、いかに緻密なプログラムのもとに言語指導・訓練を行なっても屋上屋を架すことにしかならない。

以上のような考察をふまえ、今後の検討課題を列挙して本稿のしめくりとする。

1. 語の組み合わせについての検討：だ・がのように1語の時は正しく発音できる語も、はだし・めがねのように3語になると、それぞれ、はあし・めあねのように発音の乱れが生じた。しかし、それがらくだ、とだが語尾にくると(がは語尾にくる語はなかった)正しく言えた。このことから、どの位置にくると発音の乱れが生ずるかということを確認した上で発音させる語を選ぶべきであろう。

2. 発音語順の検討：次に検討すべきはこの語順についてである。すなわち、先のだの発音でいえば不明瞭だったのはだしのみを点をおきその指導に終始するか、そうではなく、明瞭に発音できたらくだをしっかりとさせてだの発音の際の口・舌の動かし方を定着させた後にはだしの発音に向わせるか、このことについての検討も不可欠であろう。

3. 語数の検討：前にもみたように、4語以上、特に5～6語になると、途端に発音の乱れが顕著となった。と同時に指導効果もほとんどみられなかった。これらのことから、結論的には2と同じような理になるが、3語以内の発音指導を集中的に行なった上で、そして、その効果をみた上で4語以上の語数の発音指導に向かう方がよいのか、このことも検討すべき課題であろう。

4. 基礎的発音指導の検討：1・2の検討課題は1

語・2語など語そのものについての指導のあり方であるが、語以前のことも、特に精神遅滞児の場合無視できない検討課題である。なぜなら、彼らの中には言語機能障害を有する者が多いからである。この、機能障害の軽減・除去を図ることも発音指導には不可欠である。筆者の場合、前にも述べたように、それに関する指導としては舌の出し入れ・回転運動を行なったにすぎない。この基礎的指導をもっと本格的に取り入れるべきではなかったか。その指導法としては、呼吸練習とリラクゼーション及び口体操による練習を行う発音定位法、正しい発語筋の運動パターン¹⁾の発達を促すことに重点をおいた運動筋感覚訓練法などのほか、音声法、感覚一運動法など数多くあるが、彼らの障害の特性に応じた方法をこれらの中から選択し取り入れることを考えるべきであると思う。

5. 知覚・記憶など知能全般の発達促進についての配慮のあり方検討：ことばと精神発達、特に知能との関係は不可欠である。従って、ことばの発達いかんが知的発達にも影響する反面、知的発達いかんがことばの発達にも影響するのである。このことから、言語面だけでなく知的刺激を与えるなど知的面の発達促進にも意をそそがねばならない。中でも、ことばの学習にもっとも重要と考えられる知覚、記憶力の発達促進のあり方について十分な検討がなされなければならない。

6. より望ましい心理的・社会的条件づくりの検討：ことば、特に話しことばは人間関係には不可欠である。従って、ことばの発達にはよりよい人間関係を保つことがその前程となる。ところが、精神遅滞児の場合ともすれば周囲から蔑視・白眼視・無視等されやすく、それらは言語発達障害のみならず、情緒発達・社会的発達などにも悪影響を与え、ひいてはパーソナリティ全体にも歪みを与えることになりかねない。彼らをして、そのような状況においこませないよう温い人間的・社会的環境が用意されねばならない。それが豊富な言語環境を与えることになるばかりでなく、情緒の安定化、社会適応化、ひいてはより望ましいパーソナリティの発達にも寄与することになるのである。そのような方向にもっていくための方途を考えることも重要な検討課題であるといえよう。

以上、いくつかの検討課題を列挙した。が検討すべき課題がこれで尽きたわけではない。このほかにもまだまだあるに違いない。それを今後とも摸索しつつ、考察の中でもふれた検討課題ともども、1つ2つと解決、打解していき、彼らのためのよりよい言語指導を中心とする精神発達全体促進のための指導を一步一步進

めていかねばならないと考える次第である。

引 用 文 献

- 1) 中島誠 児童心理学講座 3 言語機能の発達 金子書房 東京 P.65 1969
- 2) 西村弁作他(村上氏廣他編) 新生児・小児の発達障害診断マニュアル 医歯薬出版 東京 P.155
1982
- 3) 横地清 幼年期の思考 誠文堂新光社 東京 P.143~145 1971

昭和 61 年 3 月 31 日受理